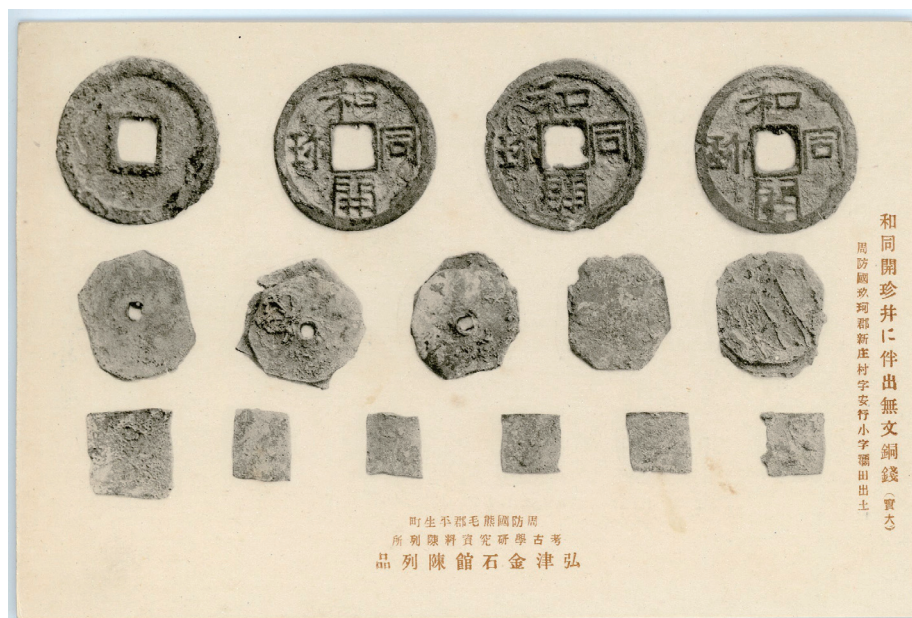


和同開珎・皇朝十二錢



* 小川五郎収集史料1066-1 「弘津金石館陳列 和同開珎並二伴出無文銭絵はがき」

解説

律令の制定や都城の造営によって、唐にならった統一国家が実現すると、歴史の編纂などの国家事業とあわせて統一銭貨の铸造・発行が計画されました。銭貨を铸造するための「铸銭司」は中央に限らず銅の産地や工人の存在、交通の便などに規定されて河内・長門・周防などにおかれました。

長門の铸銭所跡からは和同開珎の铸型（銭范）をはじめ銭貨の铸造に必要な器具片が一括して出土しています。その後铸銭司は周防に移され、9世紀から10世紀にかけて、いわゆる皇朝十二銭を铸造しましたが、940（天慶3）年には藤原純友による襲撃を受けて焼き打ちにあうなどしたため、乾元大宝の铸造を最後に廃絶しました。

写真の和同開珎は柳井市新庄の濡田廃寺（創建は白鳳時代）付近から出土したもので、同所からは和同開珎12枚・無文銭300枚以上のほか鉄器類が出土しています。山陽道から大きく離れた地ですが、仏教文化と銭貨の地方普及のさまが窺えます。

* 「弘津金石館」は山口県の考古学の草分けであった弘津史文が自宅に隣接して作った私設博物館です。同じ絵はがきが河崎家文書1516にもあります。